

三嶋神社資料調査報告

水谷友紀

三嶋神社祭礼調査の概要

三嶋神社（京都市東山区）では、現在、古文書等の調査を進めている（『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第4号参照）。目録データ入力・デジタル撮影はほぼ終了しており、今年度は祭礼の記録を実施した。その詳細は来年度刊行予定の報告書に譲るが、本稿では今回の調査記録を抜粋して紹介しておきたい。

今年度は、1月歳旦祭、9月神幸祭、10月鰻放生大祭、11月御火焚祭、12月お餅つき・除夜祭など、氏子崇敬者のかたたちの参列がある祭事を中心として調査を実施した。なお、末尾に小栗内外大神宮（茨城県筑西市）にて行われた太々神楽（後述）の様子を添えた。



写真1 本宮のお飾り

歳旦祭／その年一年間の祭儀の無事奉仕と、氏子崇敬者の守護を祈念する。午前中より徐々に氏子さんら参拝者が集まりだす。年が明けたすがすがしさに包まれた雰囲気の中、神職により祝詞が奏上される。

神幸祭／9月15日夕刻より宵宮祭、御旅所祭。神社前には子ども向けの露店も出され近所の人などで賑わう。当日の9月16日は、午前中に咲耶（さくや）会（三嶋神社の祭事に奉仕する氏子崇敬者の組織）のかたを中心に、神輿の飾り付け。昼前頃に神輿の担ぎ手のみなさんが

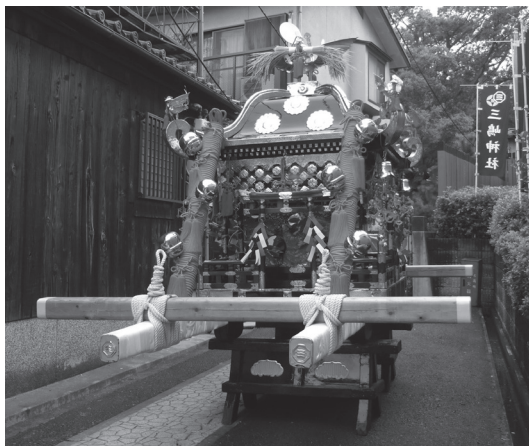


写真2 飾り付けが終わった神輿



写真3 いよいよ神輿が神社本宮を出発

神社前へ順次参集する。神輿巡行は剣鉾を先頭に、子ども神輿・大神輿という順で出発(写真2・3)。「ホイットホイット」のかけ声に合わせて神輿が進む。沿道には見物人の姿もある。子ども神輿が先に巡行を終えるが、大神輿は渋谷通りを西へ下り、東大路通りの馬町交差点を越え大和大路通りへ向かう。

鰻放生大祭／午後より鰻を扱う業者のかたがたが参列。当神社によれば、鰻祭の起源は定かではないが、当神社に祈願した者は、神使である鰻を禁食し、祈願成就なれば、御礼に鰻の放生をするならわしという。一度途絶えたというこの鰻祭は、昭和29年(1954)に再興された。



写真4 鰻を池に放生

御火焚祭／日暮れ頃、点火された護摩壇に、奉納された護摩木を入れ焚きあげる。地面をあたため、春の訪れを願うとともに、護摩木に書かれた氏子崇敬者の祈願成就を願う神事。参拝者へは鎮火でぬくめたみかん、その他、稲穂、お菓子が配られる。



写真5 あたたかな炎に護摩木をくべる

お餅つき／早朝より、当神社咲耶会のかたがたと氏子さんらが中心になって餅米の準備を始める。洗った餅米を蒸して搗く。今回は55kgの餅米を使用。



写真6 おとなも子どもも一緒になって和気藹々とした雰囲気(左)。できあがったお鏡餅(右)



写真7 神職が祝詞を奏上
(宮司様より写真提供)

除夜祭／日の入り後、当神社宮司家神職のみで齋行。無事に祭儀が奉仕できたこと、また、氏子崇敬者への加護を感謝し、一年を締めくくる。



写真8 神楽の一場面

小栗内外大神宮太々神楽／今年度は小栗内外大神宮（茨城県筑西市）にて行われた太々神楽を見学した。この太々神楽は、寛延4年（1751）、三嶋神社神主友田氏らが当神社へ伝授したという由緒がある。この地域に関連文書がいくつか残されており、今後精査したい。

今年度実施した祭礼調査の概要は以上である。三嶋神社文書には祭礼関係史料も残されており、古文書の内容とも比較しながら研究を進めたい。神職や祭礼に奉仕するひと、参列するひと、見物するひとが集う現場の様子は、古文書の内容が、あたかも3Dとなって立体化し、見ている者の眼前に飛び出してきたかのようなようである。しかし、それは当時のすがたそのままではない。時代を経て今では失われてしまった意味や行われなくなった次第もある。こうした出来事の一つ一つが積み重なり、現在に至っている。その過程に改めて思いを致しているところである。

【参考文献】

『茨城県指定無形民俗文化財 小栗内外大神宮の太々神楽』（太々神楽友の会、2006）
『社報三嶋の御社』16号（2014）、同19号（2017）、同20号（2018）

【謝辞】 このたびの祭礼調査におきましては、三嶋神社、三嶋神社咲耶会、祭礼にご奉仕・ご参加のみなさん、筑西市教育委員会のみなさんにはご理解を賜り、多大なるご協力をいただきました。まことにありがとうございました。